

世界が求める技術力



業態の転換や新規事業への参入。企業には、幾多の困難を乗り越えてきた「決断の歴史」がある。コロナ時代を乗り越えるため、企業トップの「人生を変えた瞬間」「転機となった出来事や出会い」にヒントを求める。

(統合編集局長国本真志登)

〈随時掲載〉



大垣精工 (大垣市)

上田勝弘会長 (81)

「海外に進出する必要はない。世界が欲しがり、わが社に足を運んでもらえる技術で勝負する」。工業製品の生産を支える金型メーカーとして1968年に創業、21世紀初頭のIT不況やその後のリーマン・ショックを乗り越えてきた。現在は5G(第5世代移動通信システム)端末に使われる直径3・7ミリの精密部品の金型も製造、同0・7ミリの突起をプレス加工できる高い技術を有している。「ほかではできない仕事を実現する」。メイド・イン・ジャパ

5G端末の精密部品、0.7ミリの突起を加工

別の取引先と相見積もりをとられていた。設備投資後に仕掛けられた価格競争。「経営にヒューマンイズムが欠けている」。売り上げの45%を占めていた大手企業との決別を決め、「価格競争に左右されない技術力で生きる」と決断した。

◆ IT不況は「一時的な受注減と予測していた」ものの、2年連続の赤字に陥る。金型メーカーは技術が商品。「この時ばかりは社員の雇用を守るため自社製品に手を伸ばした。体重計付きフットドライヤーを製造したが、結局は電機メーカーに勝てない。安い模倣製品もすぐ出回る」。挑戦と撤退で得たものは「自社製品ほど難しいものはない」ということだった。

◆ 「人を大切にしたい」と独立した経緯から「企業は人材が利益源。労務管理が大切」と考えている。また「常に独自の技術を開発し、時代が必要とする技術の潮流を読むこと」を目指し続ける。「まねできるならやってみよう」との自信は、培った技術力に裏打ちされている。

会社の沿革

1968年、大垣精工設立。78年、本社新工場完成。84年、セイコーハイテック設立。2008年、輪之内工場完成。10年、長崎新工場完成。11年、沖縄工場稼働、金型先端技術開発センター設立。本社は岐阜市浅西3丁目92の1。

岐阜新聞
Webに動画

